

日本婦人の不行義

醫學博士 北里柴三郎氏談

家庭衛生に關する御話を承はる爲め北里醫學博士を御訪ねしました時、博士は徐ろに微笑を漏らし、日本の婦人に甚だ不行儀な悪いことが一ツあると被仰いました、婦人に不行儀なこととは何であらう而も「日本」の云ふ字を冠せらるゝに至つて聞捨てになりませぬ、それは何でございますか」と、疊みかけて伺ひますと、「マア言ふのは廢さう」と云ひ消してお了ひになりました、「そんなことを被仰らないで御都合が惡ければ匿名にいたして置きますから……」と退引ならぬやうに御請求いたしましたので、「では仕方がない言ひませう、けれども、私の言ふことは、一言半句にも責任を持つて言ふのですから、口を出した以上は匿名には及ばぬ」との深い御語、言ひ辛いことを婦人の爲めに注意して下さつた博士の御好意を多としお互に悪い習慣を改めるやうに致したいものです、博士は

下の如く語られました。
日本婦人が小用を耐えることが出来ず、一日の中に幾度も、便所に通ふと云ふことは確かに不行儀千萬な悪い習慣と云つて宜い、例へば宴會なり其他會合の席に列する貴婦人方でも、三時間と小用を耐へて居ることが出来ないではありませぬか、此間も某所に招かれて往つて見て居ると、餘興の幕合に綺羅を飾つた令嬢や貴夫人方がぞろぞろと、席を立たれる何處に往かれるのかと見て居ると、皆使所への通路へ向はれるので、何うも不體裁極つた話ではありませんか、或人は多人數集會の所では便所に往つて高價な香水を散布した巾手から床しい香を四方八面に放つのを、此上もない自慢として居るとは以ての外の心得違ひで、あの不體裁を西洋人が見たら何と思ふで有りませうか、獨逸邊で學生がヒヤホールに入つて盛に鯨飲をする、屢々小用に立つことはあるが、西洋の婦人が、他處へ往つて矢鱈に便所に通ふなどと云ふ事は恐らく見ない圖である、小用を耐えて居られんと云ふのは一つの悪い習慣であります決して

身體の組織が違ふのではないのだから、妻や娘にも此事に就て始終叱言を言つて居ります、一體人間と云ふものは一晝夜に三度小用を足せばそれで充分なものです、それ故幼少の時から然う云ふ習慣を附けさへすれば、何でもないことであるのにそれを阿母さんが先頭になつて、無暗に小用に立つて見せるから子供も見やう見真似で、遂に寸時も耐えて居られぬやうな習慣になるのです餘處にお客に往くときは、お湯や冷水をがぶぐぶ飲まず家を出るとき、小用に往つてお行儀良くしておいなさいと云ふことを小さい中から教へ込むのが大切であります、今俄かに奥さんやお嬢さんに向つて貴方は無暗に小用に往つて可けませんねと、真向から攻撃したら、或は健康を害するやうなことがないとも保し難いが、それとても一體日本人は一日の飲量が多過ぎるから幾分でも之を節するやうに注意すれば、三度往く所は二度で済むやうになります、外國婦人と入り交つて舞踏會に出で、或は音樂會などに列しながら外國人は秩序整然として堂々たるに拘はらず、日本人はそこくと立つ

て便所の通路に押合をする、之を見る人の感じは何うであるか、些細なことのやうであるが、關係の及ぶ所はなか／＼大變な問題であると、私は常に歎息して居るのであります。

眼の養生

暑が厳しくなるに伴うて往々逆上の氣味から眼を病む人がある、眼程あらゆる五官器の中で、大切なものは無い、殊更注意が肝腎である、分けて視力の弱い人の子や、眼病者のある家庭の人は、尙一段の注意が必要である、何人も、氣を注げなければならぬのは、塵埃や、煤煙、有毒瓦斯、高度の熱及寒冷、其他強い風などが眼に當つたり、入つたりしないやうにせねばならぬ事だ、又凡ての種類、の傷害が眼に加はらないやうにする事も大切である。

▲眼と光線の關係 光線は、眼に多大の影響を與へるもので、餘り強かつたり、眩しかつたりする